

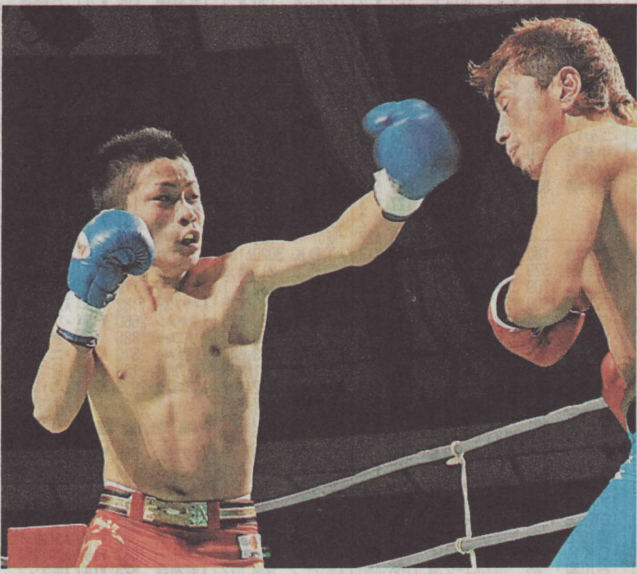
### 競うCO

コピー機用の「滑り台」を下りる。部品を持ち上げた荷台は元の場所へ入る。水が入ったボトルが動力源。事務用紙のリコーの工場の二酸化炭素(CO2)削減に向けた取り組みの一つ。地球環境への負担を減らす「環境経営」が企業の事業戦略のキーワードに。CO2の長期目標を示す企業が出てきた。

# ホームレス経験 16歳、格闘家に

東京都台東区に住む都立定時制高校1年生の高嶋龍弘君(16)が25日、大阪市で開かれた格闘技「シュートボクシング」の大会でプロデビューし、判定勝ちした。一時は自暴自棄になった自分が奮起できたのは、隅田川べりのテントに住まわせてくれたホームレスの「おっちゃん」が励ましてくれたから——という。

## デビュー戦飾る



プロデビュー戦で勝利した高嶋龍弘選手(左) —25日午後、大阪市大正区、諫山卓弥撮影

### 街 メガロポリス ひとつ Megalopolis

#### 墨東病院の体制 2月に改善要望

都に3区医師会など 脳出血を起した東京都内

の妊婦が8病院から受け入れを断られた後に死亡した問題で、最初に断った都立墨東病院(墨田区)の産科医不足について、地元3医師会などが今年2月、文書で改善を求

めていたことがわかった。命の危険がある患者が出た場合に同病院に送る墨田、江東、江戸川の3区の医師会と産婦人科医師会が、同病院と都病院経営本部あてに出したと

いう。文書では「難問の多い周産期医療だが、都民が安心できる体制を」と要望。その上で、「毎年(産科医が)減少している間になぜ補充をできなかったのか。書面で次回会議までに(回答を)お願

達心が心配してゐる」とぼつりと聞いた。残してきた弟や道場の練習仲間が急に恋しくなった。「もう一度ちゃんとやり直そう」。帰宅した日、おっちゃんは道場まで送ってくれた。

一方、舛添厚生労働相は27日午前、江戸川区医師会幹部と懇談し、「総合周産期母子医療センターを守っていくには、医師がいらないといけない。地元医師会の医師や病院、都とも協力して、前向きにやりたい」と述べた。

実はこの生活を、道場の鈴木剛生会長(42)は知っていた。しかし、「本人の意志で帰ってきてほしい」と待っていた。再会した家族は泣き、道場の練習生は「死んだかと思っただ」とからかいながらも喜んだ。

■「元若ノ鵬解雇は正当」 大塚問題で日本相撲協会を解雇された元幕内力士若ノ鵬(20)が、力士としての地位の確認を求めた訴訟の第1回口頭弁論が27日、東京地裁(渡辺弘裁判長)であり、協会側は「解雇処分は正当だ」とする答弁書を提出し、争う姿勢を示した。

シュートボクシングはキックボクシングに似ていて、投げ技や立ったままの関節技も認められている。56kg級に挑んだ高嶋君は初めはプロのリングに緊張した様子だったが、次第にパンチが決まりだし、2-0で判定勝ち。「緊張して普段通りの自分の動きができなかった」。初勝利の喜びよりも反省を語った。始めたのは小学4年のころだ。その2年前に父を亡くし、母が働きに出ている間は、5人兄弟の三男として弟2人の面倒を見ていた。家事

が一段落し、耳を澄ますと、家の外からにぎやかな若者たちの声が聞こえた。家の向かいに、現在、練習している道場があることを知った。自分もやってみたくて入門した。中1の秋、家事や練習で疲れ、学校を休みがちになった。家事もつらくなり、制服のまま家出した。ふらふらとさまよったあげく、隅田川の土手にたどり着いた。所持金もなく、空腹だったが、家に

は戻りたくなかった。見回すと、青いテントが目に入った。中にいた50歳代ぐらいの男性に「しばらく住まわせて下さい」と頼んだ。男性は少し驚いていたが、快く受け入れてくれた。それから半年間、同居生活が続いた。食事は「おっちゃん」がコンビニエンスストア

から集めてきた賞味期限切れの弁当で、下痢をしたこともある。気持ちが悪くても、もっぱらテントの中で雑談をするか、毛布にくるまって寝て過ごした。おっちゃんは立ち入ったことを質問しなかった。でも、2月のある寒い日、「そろそろ帰ったらどうだ。家族や友

■「ミステリー新人賞選ぶ」 広島県福山市出身のミステリー作家・島田荘司さんが選者を務める「ばらのまち福山ミステリー文学新人賞」の実行委員会は26日、第1回の受賞作に札幌市の会社員松本寛大(むねひろ)さん(37)の小説「玻璃(はり)の家」を選んだと発表した。主人公の心理学者が死体が焼却された事件の謎を追う内容で、来年3月に講談社から出版される予定。

## おっちゃんは受け入れ、背押ししてくれた